

スタッフ座談会： コレクションビルディング（蔵書構築）に携わる者として

〈出席者〉	すぎやま よしこ 杉山 良子 (日吉メディアセンター課長)	やまなか 山中みどり (日吉メディアセンター)
	いがらし ゆみこ 五十嵐由美子 (三田メディアセンター主任)	しばた ゆきこ 柴田由紀子 (理工学メディアセンター主任)
	おざわ 小澤ゆかり (志木高等学校図書館)	いながき ゆいか 稲垣 侑華 (公会／編集・湘南藤沢メディアセンター)
		なかもら かすみ 中村 和美 (編集・日吉メディアセンター)

1 はじめに

本特集にあたり、メディアセンターで長年テクニカル業務に携わってきたスタッフが語り合う場を設け、慶應義塾の研究・教育・学習・医療を支えてきた思いとともに、自身の経験を基にこれまでの業務の変化や今後の業務のあり方について忌憚のない意見交換会（座談会）を行った。これからのテクニカル業務を牽引していく中堅・若手スタッフに伝えたい内容である。

なお、進行の参考にするため座談会の参加者には事前アンケートによるヒアリングを行っている（表1）。

2 テクニカル業務とは

稲垣： 本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。コロナ禍ですが、広い会議室で対面での座談会を開催することができて嬉しく思います。

さて、図書館業務には色々ありますが、その中から今回は選書や発注手段などの変化や、教員や学生のニーズの変化、さらには未来にむけて守るべき蔵書とはなにか、選書・収書に携わる際の留意点、後進のスタッフへ継承すべき理念やノウハウなどを座談会形式で皆様に語りあっていただきたいと思います。お伺いしたいことはたくさんあるのですが、その前にテクニカル業務の内容についてお話しいただけますか。

杉山： もともとテクニカル業務は収書と整理が大

きな二本柱で、収書課では選書や受入をし、整理課が目録や分類をしていました。そして、今は主に選書の部分を各キャンパスのメディアセンター（以下「地区」とする）で行い、受入と目録はメディアセンター本部（以下「本部」とする）で集中処理していますので、みなさんが「テクニカル」とおっしゃっているのは「収書」です。

小澤： 請求記号付与も絶対入ってくるだろうと思います。コレクション形成という意味で。コレクションビルディング的には除籍や廃棄もテクニカルですよ。

杉山： 一般的にテクニカル業務という時には、収書と整理業務を意味すると言いましたが、今の各地区のテクニカル業務では、請求記号付与がかなり大きい位置を占めているのは確かでしょうね。

稲垣： ありがとうございます。今まであまり意識せずに「テクニカル」と言っていましたが、地区や本部で行っている業務はそれぞれテクニカル業務の一部分であるということを改めて認識しました。

3 選書のコツ

稲垣： それでは本題に入りまして、まずは選書のコツについてお伺いします。地区ごとに選書基準があって普段はそれに沿って選書を行っています。最近は研究テーマが幅広く

なっていたり、逆に細分化されていたりしてニーズに合わせた選書が難しいと感じています。選書を行う上でコツや心がけていることはありますか？

五十嵐：選書をするという作業は、もう何十年もやっているのに未だに苦悩しますね。

柴田：理工学部は最近他機関との共同研究が増えて、医工連携の研究や、リーディング大学院だと人文社会学系寄りの研究をされている人もいますので、今までの理工学というよりは幅広い主題範囲が広がって、きっちり理工の専門書だけではなく、学際的なところも含めていくつもりで選書しています。

小澤：湘南藤沢キャンパスも研究分野など先生が扱うもの自体がどんどん変わっていくので、悩むことが結構ありましたね。

五十嵐：違う分野に目を向けられるのは気分が変わっていいですね。あ、こういうのもありませんか、というのが最近増えてきて。医学と理工学の分野の中でも三田メディアセンター（以下「三田」とする）の蔵書にできるものが見つかる嬉しそうです。

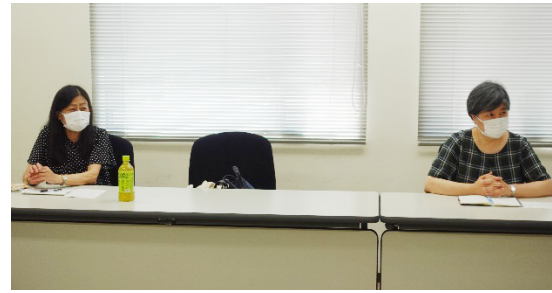
柴田：重複調査をしていると、五十嵐さんが三田の選書担当に移って少し傾向が変わったなと思います。理工学メディアセンター（以下「理工」とする）の目につくものでも三田ですでに発注していたりして。

杉山：文理融合という言葉を目にするようになってから選定する主題が広がってきているのかもしれないですね。

小澤：三田はいったん受入すると見直して減らす機会がないので、選書で迷った時、これを入れてしまうとずっと残ってしまうけど大丈夫か、と悩むこともありました。

杉山：日吉メディアセンター（以下「日吉」とする）の場合は主たる利用者が学部の1,2年生なので、バルコニーコレクションという軽読書系と、本体のコレクションとの線引きが一番難しいですね。

山中：だからといって何でもあり、というのはないですね。日吉は公共図書館的な要素がなければいけないと思うけど、でも公共図書館ではないですから。



杉山：私たちがやっているのは大学図書館のコレクションビルディングであって、公共図書館とは蔵書内容が違うということを学生にわかってもらい、私たちは私たちが買わなければならない本を買いたいですよね。

山中：理工に異動したばかりの時、理工はまず雑誌の継続購読を確保してから図書を買う、1,2年生向けの基本的なものは日吉に入れるため理工は専門的なものを購入する、と考えていました。でも、当時の所長（教員）に、1,2年生が使うようなものは日吉であればいいということではなく、1,2年生が授業で利用するような図書も積極的に入れてください、そしてもし専門書中心という考えがあるのだったら、そうではなくて学生のためにまずしっかりした基本的な図書を購入することが大切です、と言われたのが、私としては驚きでした。他の先生方にも同じことを言われましたし、実際に基本的な図書は本当によれよれになるまで使われていました。このことが、理工にいたときの私の考え方の基本になりました。選定に関しては自分たちの思いだけではなく、色々な方の意見を聞くことは本当に大切だと実感しました。

小澤：貸出やILLの情報を選書の参考にしようという話は出ますよね。学外ILL取寄せ情報はもちろんですが、学内ILL情報も参考になる。必要な地区で足りていない、ということだから。

杉山：他大学から取り寄せると言っても、蔵書としてなくても仕方がないというものと、絶対に持っておかなければならないものがあるの、ILLのデータは選書にはとても良い情報源だと思います。

五十嵐：持っておくべき資料の所蔵がないとわかった時に悔しい気持ちになったこともありましたが、今となっては他大学にあればよいかという考えに変わりつつあります。

小澤：それはそれでありだと思います。もうここまで来たらうちの地区、うちの大学、早稲田、国内、海外でどこかにあればいいという方向にいてもいいかなと思います。そうなるとILLのギブアンドテイクが成り立たなくなる。電子で購入した場合も、広くみんなで使っていたコレクションがそれぞれの大学の人しか使えなくなってしまう。

杉山：そうなったときに慶應で絶対に持つべきものは何？という話になりますよね。昔、三田では洋書はUniversity Pressなどいくつかの出版社のものは積極的に買っていたので書庫が一杯になってしまった。洋書はそれほど貸出が多いわけではないので、今やリクエストベースで、電子ブックを購入するのが主流。そうすれば使いたい人は電子で使うことができ、書庫も圧迫しない。一方で、本当に電子ばかりでいいの？やはり書庫になればいけない本があるのでは？というのが今結構悩むところですね。

4 電子？ 紙？ どちらを買う？

杉山：今まで国内で慶應の蔵書が他大学の研究者にも使われていたこともあって、それが電子ばかり買うことになったら紙の新刊書がない図書館になる。内部の先生たちは充足されているけれど本当にそれでいいの？書庫に行くと古い本しかない、新刊書が全然ない状態になって困らない？と考えると、やはり紙で買わなければいけないものがあると思います。古いものを電子に置き換えて、スペースを作って新しいものを買うとかね。

五十嵐：図書館のことを考えてくださる先生だと、自分の研究に必要な本は自分で買い、その上でこれは図書館に所蔵すべきというものを推薦してくれます。ただ、そういう先生はもう片手で数えられるぐらいに減ってしまっているし、結局、その先生の研究分野

だけが充実してしまい、他は全然…ってことになってしまうのですが。

杉山：ちょっとここだけ見たいという時には電子は利便性が高いけれど、すべての本に対して瞬時にこれは紙、これは電子で買うと判断するのはちょっと難しい。

柴田：教科書や参考書指定になっているものや、定評があって版を重ねているようなものは、多くはないですけれど紙も電子も買うことがあります。医学書もそうですが、理工学分野の洋書はやはりページ数が多く厚みがあるものが多くて書庫を圧迫するので…ちなみに、学生に聞くと使えるかどうかをまず電子で見て、使えそうだったら本を借りたり、買ったりしているようです。

山中：購入希望であえて冊子って言う人いますよね。やはりじっくり勉強するには紙がいいのかしら。

柴田：洋書は電子の方が圧倒的に多いし、それも購入希望を中心に選定している状態なので、そこを気にしています。気を付けていないと、言われるものしか購入していないみたいになってしまいがちだし、今使われるものだけ置いておけばいい、というのもちょっと違うような気がします。

杉山：電子はすぐには買えるので、言われたときに買えばいいと思うけれど、紙は買っておかないと買えなくなってしまう。そこが難しい気がします。最近和書も絶版になるのが早いから。

小澤：結局選書って、今使うものだけではなくて将来的な利用者のために選ぶところもありますよね。今ではないけど将来的に使われるはずとか、今は注目されているけど学術的ではないとか、どう利用されるかなどを思い浮かべつつ購入する。それが、思ったのと違ったりもしますけれどね。

杉山：私には利用者に図書館に行って本と出会ってほしいというのがある。棚をみてほしい。大学に入ってすごく勉強心に燃えている学生が大学図書館に来て「これが大学図書館の蔵書か！」と思ってほしい。

五十嵐：それは図書館員のエゴのような気がします。

NDCで並んでいるという意味がわかってない学生は自分の探している本しか目に入っていないで、その脇に何があるか見えてないのでは、って思う。

杉山： KOSMOS（慶應の蔵書検索システム）で検索できれば別にどこにあってもかまわない、ということ？

五十嵐： そうです。ブラウジングなんかできなくていいから早稲田みたいに自動閉架書庫から必要なものだけ出す仕組みがあってもいいと思います。そうすれば今よりもっと資料が保存できる。とは言っても、やっぱり図書館は開架で本を見せなきゃだめですよ。

杉山： 貸出回数が多いから良い本かということそんなことはなくて、貸出がそれほど多くなくても絶対に100年使われる、100年後でも読み継がれるものはある。そのロングテールの本を逃さないようにしていくのは結構難しいけれど、それが大学図書館の使命だと思う。

五十嵐： だから三田はきちんとした学術出版社の出す学術書は全部選定する方式。しばらくは利用されないかもしれないけれど、絶版になってしまっても古書市場を探ることになるなら、やはり全部買うべきだと思っています。

山中： 三田がきっと冊子を買うだろうから日吉は電子で利用できればよい、と思っても、電子が出るかどうかはそもそもわからないので、結局、冊子を買うってことはあります。選書をする段階で判断材料が整っていれば、購入の仕方は変わるし、全学的な取り決めができて良い管理ができるのではないかな。

杉山： 昔、湘南藤沢メディアセンター（以下「SFC」とする）では、和書は全部電子ブックで買えばいいのに、と言っていた時があった。今より条件が良いアンリミテッド¹⁾のような契約ができるようになっていけば、紙は三田と日吉が買ってSFCは電子で買うとか…そのあたりの住み分けができると良いですね。

五十嵐： 人気のある本は冊子が何冊あっても足りないのですからね。

小澤： 教科書やリザーブブック²⁾になるようなものを、何人分も揃える必要があるのだろうかという悩みは常にありました。

杉山： 200人の授業だったら使いたい人はたくさんいるでしょうが、ならば複本を大量に買うかということそれは違いますよね。

小澤： 基本書で何年か後にも使われるものだったら2冊くらいまでは買ってもいいけれど何十冊も、は違う。リザーブブック問題の悩みは結構あります。

五十嵐： 私は、貸出不可のリザーブブックは教科書に指定された本がいつでも書架にあって読むことができるサービスとして、1冊あれば良いかなと思っていますが。難しいですね。



小澤： アメリカなどの外国のリザーブブックみたいに、学生に買わせなくてレポートを書くために大学図書館で用意する、という先生もいますよね。

杉山： アメリカではそういうのが当たり前だからそれをご存知の先生は同じ方法で、と思うでしょうけれど、日本では違いますからね。

5 リソースシェアリング³⁾の可能性は？

稲垣： 話題が変わりますが、電子ブックを購入する一端に書庫狭隘化問題も関係しているようなお話が出ていました。過去にその問題を検討するために保存調整とかリソースシェアリング委員会^{4) 5) 6) 7)}などがあったと思いますが、これについてどう思いますか？

杉山： 白楽サテライトライブラリー（以下「白楽」とする）^{8) 9)}が閉鎖になる時に、和書は2

冊まで、洋書は1冊にしようとして一生懸命重複調査をしましたが、反映するに至らず、複本のまま山中資料センター^{10) 11) 12)}に移動してしまいました。

五十嵐：調査したのにもったいない。それができていたら良かったですね。

柴田：調査はしましたが、どちらの複本の状態がいいかが分からなくて…

杉山：そうそう、状態が良い方を残したほうがいいけれど、それを誰が確認するの?となつて…。白楽のスタッフが着手したけれど全然進まなかった。

五十嵐：外部書庫の場合、比べる作業は無理があるのでどっちを残すかを決めて一気にやる。これからはますますスクラップアンドビルドしていかないといけないし、慶應しか所蔵がないなんてことは滅多にない。あとは分担保存でしょうか。内容がどの程度の資料までは日吉が受け持つとか、三田ではこうするとか。そういえば、各メディアセンターの蔵書方針を寄せ集めて一つの蔵書方針を作る、という作業をやった気がします。

柴田：やりました。分類表を出してきて作業をした覚えがあります。最後まで全然行き着かなかったけれど。

杉山：リソースシェアの話は昔から出ては消え、出ては消え、そして成果を出せずにきている。せっかくいいことを考えていたのに頓挫し、やっていたことすらもう忘れかけられている。そういう意味では全キャンパスで分担して主題や専門性のレベル、収集対象の媒体を決めてリソースシェアしようというのは永遠の課題です。ぜひこの座談会を機にまた考えてほしいです。

五十嵐：「永遠の課題」をきちんと残して託すって感じですね。

杉山：そうね。将来に託す！

一同：（笑）

6 変えてほしいこと、維持してほしいこと

稲垣：選書の色々な話をしていただきましたが、今後業務を行うにあたり変えてほしいこと、

維持してほしいことはありますか？

柴田：目録作業は、現在は本部だけでやっているから、その知識がある人が地区になくなってしまって、請求記号付与の時の書架分類を選ぶ力や、アクセスポイントにどういのが付与されているかを見る力がなくなっているのではないかと感じています。今は本部の人たちだけがそういう力をつけていっている。見つけるためのデータを作る、それが目録作業ですが、そこがうまく結びつかないという心配はあります。

小澤：正しくルールに従ってやらないと収拾がつかないのはわかるけれど、何のために目録を取っているのか、利用者に資料を使ってもらい、探してもらうために取っていることを理解した上で、他との整合性を見てほしい。それと、歴代の様々な書誌が混ざって経緯がわからないのも気になりますね。その時どきは、こういう様々なデータがあるので気を付けてと、利用者や接点のあるレファレンス担当にも説明できますが、注意すべき書誌が何代も続いてしまうとそれも難しい。

五十嵐：もしかしたら近い将来、目録のルールとか、もうそんなのどうでもよくなっちゃうかもしれない。そういえば、図書館システムの話じゃない部分のテクニカル業務について横の繋がりがいいと思っていたのですが、そういう会議体があってもいいですよ。

柴田：選書の話をする場があまりないですからね。

山中：地区で持っている問題、例えば購入希望フォームどうする?とかそういったことを話す場が今はない。だから去年のMediaNet¹³⁾で柴田さんが原稿を書くときに、地区の担当者だけで話をしすぎて盛り上がりましたね。

柴田：システムとか業務効率ではなくて選書の話とかを中心にできたから。1年に1回くらいこういう会があってもいいかな、という話をしましたね。

五十嵐：テクニカルの方は全員メンバーになって、こちらではこんなことが起きましたよとか、

特に寄贈される資料の話をもっと気楽に喋れるSlack¹⁴⁾チャンネルがあったら良くないですか？

小澤：すごく良いと思います。「これどうしてですか」というのが結構あって、個別に電話したりしますよね。あと、閲覧との繋がりや連携も弱いから、テクニカルだけの横の繋がりも欲しいけれど、違う担当との繋がりもこれからもう少し密にしていって方が良いと思います。

五十嵐：それから教員との繋がりも大事。三田は図書委員会があるので、図書委員の先生とは辛うじて繋がっていますが、この頃はずいぶん希薄になっていて。最近では、専門家に相談したいなという資料があっても誰に相談したらいいか、ぱっと出てこない。もちろん、教員も変わっていくけれども、大学図書館の選書業務と教員は切っても切れないものだし、選書担当者は、どんな研究をしている教員がいるかを一番知っておかないといけないのに、これがなかなか覚えられない。

小澤：申込フォームやメールは楽だからつい連絡手段にしてしまいますが、そうするとどんどん接点が減ってしまう。

五十嵐：メールだけで話が済んでいると教員も図書館に来なくなりますよね。私たちはメールの名前を見るだけで顔が浮かぶ人が多いですが、最近はそのじゃないのでは…。

小澤：SFCは開設当初から先生が来ない感じでしたが、蔵書構築方針を作るときにインタビューをするために研究室に行くようにしたことがあります。きっかけを作らないと。購入希望でも選書の窓口には先生が来ないから、確かに全然わからないですよ。

五十嵐：三田でレファレンス担当がやる文献探索セミナーに教員も参加しているのを見かけるので、そんな時に横に行って「最近、図書館はどうですか？」ってきっかけ作りに話しかけてみるとかね。(笑)

杉山：たぶん閲覧でも同じで、カウンター業務が委託になっていて、職員は先生との接点がなくなっている。だから先生がどんな授業

をしているのか一層関心を持つ必要がある。選書するためには授業内容は欠かせないからシラバスをちゃんと読むとか、機会があったら先生とコンタクトを取るとか…どうやって先生との接点を作っていくかが、これから大事なことになると思いますね。

7 後輩職員へのメッセージ

稲垣：最後に、これからテクニカル業務に携わる後輩職員にメッセージをお願いします。

五十嵐：人に抛りますけど、長く一つの担当をするチャンスが少なくなっているじゃないですか。昔は同じ仕事をしている先輩がいて、じっくり教えてもらいながら仕事を覚えていって一人前になって、そして後輩ができて。最近を着任して前任者に引継ぎされて「今日からあなたはこの業務の担当です」。そして同じ仕事をする先輩もそばにいないで、自分だけでなんとかしていく術を身に着けて…。自分の時と違って、そこがとてもかわいそうです。

杉山：確かに人を育てる余裕がなくなっているから後継者が育たない気がしますね。テクニカルのパイプライン職員というと、大体いつもこの座談会メンバーってなるように。

五十嵐：だから、先輩としてのマニュアルを作るしかないと思っています。一番難しいことですが。せっかく一番長く仕事をしてきた三田の選書担当に戻ったので、選書業務のブラックボックスやグレーな部分について虎の巻を残したらいいのかなって。

小澤：マニュアルもそうですが、なんで今こうなっているのかわからない、というのが色々あるから、昔の経緯とかも残していかないとですよ。



五十嵐：きっと断片的にファイルとして残っているけど、今起こっている事象と繋がるファイルが存在するのかがわからないから、まず索引のようにまとめて、そこから何を見ればいいかがわかるような、まあ、そんな感じのことを考えています。

杉山：私ほとにかく、みんなに棚を見てほしい。

五十嵐：そうそう。ほんと！現場百遍よね！

杉山：書架に並んでいる本を見る。乱れているところがよく使われている主題だとか、書架を見れば色々なことがわかるので、とにかく書架と仲良くなしてほしい。

山中：私も棚に行ってほしいっていうのは本当にそう思います。とにかく書架に行って本を見てほしいな。電子に目が行くけれど冊子もやっぱり必要だと思う。私はパブリックの経験はすごく短く、テクニカルと言いつつ目録の経験もあまりなく、収書と雑誌とデータ整備がほとんどなので、もう少し色々な部署で仕事をしたかったな、という思いがあります。だから、今若い人が定期的に異動できることがすごく羨ましい。他の部署で経験したことや今の業務が様々な業務につながるということを実感して欲しいです。あとは、テクニカルは細かいことが結構多いし、いつまでに支払わないと、ここまでにデータを作らないと、という事が立て込んでくると時間に追われて苦しい時があるので、仕事が終わったらしっかり息抜きをして欲しいなと思います。

柴田：テクニカルの仕事は誰でもできる感じではなくて、重要な仕事だと思っています。目録と選書・収書があって成り立っていく部分がまだ大きくて、なんとなく裏方の仕事で地味な感じ、できて当たり前の世界で面白くないように見えたりするかなあとも思ったりしますが、とても面白い仕事だし、図書館サービスの土台を支えているという自負があって、ここまでこられたと思っています。資料にじっくり触れたりする機会も多かったんで、一度は経験してほしい。出版社や書店の知識も増えてくるし、今だと電子資料の契約やお金のことも、いろん

なことが関係してくるので、別の担当になっても知識を活かせる仕事だと思います。他の担当の人とも密にコミュニケーションを取っていけば本当に中心となる仕事をしていると実感ができるし、そういう人が増えてきたらもっと全体もうまく回っていくようになると思います。

小澤：目の前に利用者がいないところで作業をするので、自分のやっていることを不安に思うこともあるけど、でも利用者や資料を結びつけるためにやっているというのを忘れないでほしい。受入して書架に出して除籍するまでが一つの流れだから、1つやって終わりじゃなくて、こうやるとこういう影響があるとか、流れや他との兼ね合いを意識してほしいですね。人脈もあつたほうがいいと思うから、他の部署、他の担当との連携や情報収集も大事です。あとはデータのでき方を知っていると検索方法とかの教え方も違ってくる。そういう全体の流れが見えるようになるといいかなと思います。

稲垣：もっと聞いていたいのですが、時間になりましたので座談会はここで終了にしたいと思います。本当にありがとうございました。

8 座談会を振り返って

本座談会を通し、今後メディアセンターはどのような蔵書を構築していくべきか、その理念や手法の一端に触れることができたと思う。リソースシェアリング等課題はまだあるが、今利用されるだけではなく未来の学生や研究者にとっても、図書館にこの資料があつてよかったと実感してもらえような蔵書構築を引き続き目指していきたい。まずは、資料や収書に関する情報を共有できるよう、地区間そして担当間での連携を密にすることから始めてみたいと思う。

(2022年6月28日)

三田 図書館新館5階大会議室にて開催)

表1 座談会参加者からのアンケート回答まとめ

1. テクニカル業務（目録、選書・収書等）を担当して苦労したこと

全般、選書収書関連

- ・機械化されていない時代の作業量（重複調査、発注、登録、支払、台帳管理、目録、請求記号付与）の膨大さ
- ・機械化後のデータ整備（■文字の改修や書架移動の際のデータ変更）と通常業務との時間配分・時間管理
- ・語学力と主題知識が不足していることによる選書や分類作業の困難さ
- ・洋雑誌やデータベースなど毎年値上がりするコンテンツの継続中止検討と予算管理
- ・複数学部のある三田、日吉での予算配分や予算管理
- ・研究室、学部予算で購入した資料の除籍や継続中止に至るまでの調整

目録規則、分類、請求記号付与、標目付と関連

- ・利用者が資料にたどりつけず死蔵されるケース、分類表の改訂による泣き別れ
- ・システム化による業務の平準化、目録データの国内・国際標準化により、各地区の利用者に向けた特色が出せなくなり、各時代別に作成された様々なデータの存在による弊害（有るはずの資料にたどりつけない）

2. 選書の際に意識していること、大切にしていること、選書のコツなど

意識、大切にしていること

- ・利用するのは誰か
- ・慶應義塾大学の図書館として収集・保存すべき資料かどうか
- ・「利用して欲しい」資料と「実際に利用される」資料の違い
- ・予算との兼ね合い

工夫・コツなど

- ・シラバスを読みこみ、教員の研究内容を知り、研究のトレンドなどを調査する
- ・著者の経歴、既刊著作の内容や利用状況の調査、類書の有無や利用状況調査
- ・出版社の特色の把握
- ・書籍販売サイトや研究者サイトの活用
- ・様々な本や主題に関心を持つこと
- ・書店に足を運び、書評を読む
- ・教員の購入希望資料を参考にジャンル別に考慮

3. 冊子と電子のどちらを選択するかの判断基準

判断基準

- ・単著、通読する必要があるものは冊子、二次資料、共著で章ごとに独立しているものは電子を優先
- ・レファレンスブックに関してはデータベースの有無を確認
- ・一般的な新刊書（和書）は現時点では冊子を選ぶ以外に選択の余地がない
- ・洋書はできるだけ電子を選択
- ・教科書や参考書に指定されている資料は、電子があれば電子を購入するが、和書は冊子も同時に購入
- ・三田では、図書館予算の洋書は電子を選択、学部生の利用頻度が高い和書は基本は冊子を選択し、電子があれば利用頻度を考慮して補助的に電子も購入。学部図書の洋書についても図書館に準じて購入

迷い

- ・電子があれば冊子不要とは思いつけない
- ・電子と冊子それぞれの利点・欠点があり、どちらかに絞れないことがある

4. 慶應のテクニカル業務について、今後も維持してほしい点

地区共通

- ・蔵書に関して興味を持ち、書架を見ること
- ・各図書館の方針やコレクションの利用状況、利用者（現在と将来の）に合わせた選書と蔵書構築
- ・保存の面では地区を超えて協力し合うこと
- ・購入希望だけに偏りすぎない、保存すべき資料の見極め
- ・目録・分類作業の継続
- ・目録情報や所蔵情報を正しく維持しようとする姿勢
- ・システム移行やデータ・業務の平準化による変更点の記録（ローカルルールの変更や消滅、形を変えた維持方法、消滅したルールの記録など）

三田（慶應義塾図書館）固有

- ・慶應義塾図書館としての貴重書の収集、整理
- ・貴重書などの蔵書に関わる記録の維持保管（未来に必ず問い合わせがくる。図書館史としての記録）
- 収集時の情報（資料の入手経緯や推薦、寄贈者）、整理の方法

5. 慶應のテクニカル業務について、今後は変えてほしい（変わらなければならない）と考える点

キャリア支援

- ・業務を安定的に維持するための引き継ぎ体制を確立してほしい
- ・多くのスタッフがテクニカル業務に携われる機会を増やしてほしい

業務関連

- ・テクニカル業務とパブリック業務の連携・情報共有（貸出情報、購入希望、他地区図書の出借利用やILL希望などを、選書や蔵書見直し（除籍や配置換え）に活かそう）を積極的にして、よりよい蔵書を構築してほしい
- ・合理的かつ短時間で冊子の選書・発注ができる仕組みの導入（外部システムのカスタマイズ、見計らいや試読も一律同じ処理ができるなど）
- ・図書館図書と学部図書の垣根をなくしてほしい
- ・目録・分類は流用データに流され過ぎないでほしい（作成時期による目録情報泣き別れを解消し、利用者にわかりやすい目録情報を）

蔵書構築関連

- ・学内、早慶、全国、世界的な視点での分担収集と慶應にあるコレクションの活用（電子を購入しても増える冊子と保存書庫問題、分担保存）
- ・慶應が所蔵する古い資料のデジタル化（権利処理等を含む）

6. 座談会で話されたが、紙面の都合で本文に掲載できなかった話題

- ・三田軽読書コーナー「U図書」の誕生と消滅
- ・地区によって業務の処理が異なっていた時代と業務が平準化されても残る地区固有の事情
- ・雑誌所蔵の学内調整秘話
- ・電子の利用契約対象範囲：現状は大学所属者のみという契約条件になっているため、冊子は利用できていた一貫校所属者、卒業生、学外の研究者などが利用できない



座談会に参加したスタッフ
(手前左から：山中，杉山 奥左から：柴田，五十嵐，小澤)

注・参考文献

- 1) 電子ブック契約の一種で、同時アクセス数無制限、フルダウンロード回数無制限の契約のこと。
- 2) 指定資料のこと。授業期間中、授業で使用される資料を図書館内に配架して提供するサービス。
- 3) 同一タイトルで重複所蔵がある場合、利用が少なくなった資料や古い資料は学内に1冊（雑誌の場合は1セット）を残して重複分を除籍して書架を開けるための調整を行っている。
- 4) 図書予算の効率的な執行を行うことを目的とし全キャンパス規模で分担収集（保存担当館の決定、選書基準の調整）を検討する会議体として2000年に発足後、2006年度まで活動した。
- 5) 慶應義塾大学メディアセンターリソースシェアリング委員会。“リソースシェアリング委員会報告書”。2000. 10. 2, i, 193. G10p.
- 6) 慶應義塾大学メディアセンター第2期リソースシェアリング委員会。“第2期リソースシェアリング委員会報告書”。2003. 3. 36p.
- 7) 慶應義塾大学メディアセンター第3期リソースシェアリング委員会。“第3期リソースシェアリング委員会報告書”。2004. 10. 33p.
- 8) 書庫狭隘化対策として1999年～2015年まで外部に倉庫を借りて書庫として運用していた。
- 9) 関秀行。“白楽サテライトライブラリーの功績”。MediaNet. 2012. 12. No. 23. p. 26-30.
- 10) 1994年に雑誌のバックナンバーを主として保存するため山中湖畔に建設された書庫。2016年に2号棟が竣工した。
- 11) 杉山良子。“山中第2棟タスクフォース活動報告”。MediaNet. 2012. 12. No. 23. p. 31-34.
- 12) 木下和彦。“白楽サテライトライブラリーから山中資料センターへの資料移転作業と今後の運用”。MediaNet. 2012. 12. No. 23. p. 35-40.
- 13) 柴田 由紀子，新保 佳子。“購入資料に見るCOVID-19の影響”。MediaNet. 2021. 10. No. 28. p. 22-25.
- 14) ビジネス向けチャットツール。慶應では2020年の新型コロナウイルス感染症対策による在宅勤務開始に際して、メール以外の連絡ツールとして導入された。